

## 「海のオル」ール」抜粋

出所するまでの一年半の長かったこと、私は、そのとき、東京を思いきって、どこか、あまり盛り場のないところに移転する決心をしました。東京の仕事は、今までマネージメントをしてもらっていた友人が、東京で生活をすることになるので、その人にしたのむことにして、ときおり来てもらえばと考えたのでした。どこがいいか、その意見には、お医者さまも賛成してくださいました。東京は次第に空気も悪くなる、回復したばかりのからだには、もう少し閑静なところがよいのではないかという話が出ました。

テレビの仕事がときおりあります。せめて汽車に乗って二時間というのが目標になりました。二時間位なら行けるからです。

私はふと、一つのおもしろい場所を思い出しました。現在の住居の山梨県、大月市です。

この町については、古い物語りがあるのです。話はずいぶんの昔になるのですが……

関東大震災のときでした。

東京の印刷所は全部全滅でした。雑誌社で働いていた私は、大阪の印刷所に原稿を依頼しに持ってゆくために、中央線をまわって、出発いたしました。十月一日のことです。東海道線はまだ不通でした。満載の汽車は、小仏峠をあえぎあえぎ上って、上野原と、与瀬、今の相模湖のあいだは土砂くずれで不通、まだ夏服のままの健康でないからだは、秋の大気に冷えきって貧血がおきてきましたので、いきなり駅の名を聞くと下車してしまいました。どこかで休みたいと思ったのです。

「どこかに宿屋はないでしょうか」

と聞くと、教えてくれた人があって、大黒屋という宿にとまりました。宿のお内儀さんは四十代で、びんと大まるまげに詰った小母さんでしたが、

「女の一人旅ですか。それじゃ娘の部屋に寝かしてあげましょう」

一泊五十銭也、紫のぶどうを山もりに出してくれました。熱っぽい舌の上にそのぶどうの冷たさの快くうまかったこと。

その後、私は、戦争のときに、長野に行きました。途中やはり乗っていられなくて、この宿をさがしたとき、宿の代は、今、私の友人のお嫁さんの代にかわっていて、それから、ときおりに、泊りに行って親しくしていました。

汽車が止まると、なでしこの咲いている土手に、しんとした瞬間に、虫の音がします。

私はここに住居をみつげようと思って、その友人に頼んだのです。一つは都会でない方が、あの子が帰ってきたときによいだろうと考えましたし、マイシンをたくさん使ってまずは回復したからだでも、たった一人で、都会で生活するのは大変だと思つたからです。生活費も安いであろうしと考えていたのですが、お医者さまがついて来てくださって、町営住宅の中の一軒をみつめました。

「ここがいいじゃないかな、遠く山も見えるし、あまり車の音もしないし、東京まで二時間で来れるし」

ということとで今の猿橋町に決まりました。

私は東京の家を引きはらって、この山峡の小さい町に引越してきました。女一人の住居ではたいして荷物もありませんし、岩田老人に別れるのが、寂しかったくらいでした。